

は、おびただしい数の行方不明者の張り紙が重なるように張られていた。日本人の顔を見つけて、1歩も2歩も近づけば、顔写真の下に特徴書きが……。「ジャパニーズ、髪の色は黒。目の色も黒」。写真の余白に日本から駆け付けた父親の書き込みを見つけて、涙が込み上げた。「お前なら必ずがれきの下からはい上がれるはずだ。頑張れ。待ってるぞ！」。

あちこちですぐに鎮魂の式典が催された。犠牲者の母国の旗が居並ぶ中、日本の国旗はあったのだろうか。ペンシルバニアで墜落したユナイテッド93便で犠牲となった日本人学生の母親は、息子の遺体にかけられた星条旗を見て泣き狂った。「あんたたちが恨みを買うようなことをしたから、息子がこんな目に。あんたたちの国旗でうちの息子をくるむな！」。母親は市内で白と赤の布地をかき集めて、夜を徹して「日の丸」を縫い上げ、息子の棺にかけている。

犠牲者の親御さんである住山一貞さん。遺体搜索は、ベルトコンベアに無造作に積み上げられたがれきが機械音に急かされてたった一巡しただけ。「息子さんは天国に蒸発したね」と言いのけた検査官に言葉を失ったという。

白鳥晴弘さんも息子さんを亡くした。その後、「アフガニスタンでは電気がないせいで、本が読めず、世界のことを知り得なかつたのでは。テロの連鎖を起こさせてはならない」と、癒えることのない深い悲しみを乗せ、アフガニスタンと日本を何往復もしてソーラー電灯を現地に運び続けてきた。

日本人が始め日本人が閉じた歴史

悲劇の後、対岸のスタテンアイランドに犠牲者のために慰霊碑を建立する話がもち上がり、世界19カ国から179人がコンペティションに臨んだ。結果、見事に指名されたのは、若き日本人

建築家の曾野正之氏の作品、『Postcards』だった。宗教とも人種ともイデオロギーとも無関係な、日常的で世界共通のポジティブなコミュニケーションのシンボル。犠牲者と家族をつなぐにはこれしかない、との思いから、絵葉書を2枚の羽に模し、内側には267人の犠牲者の横顔を彫り込んだ。その横顔の視線の先は自分たちを飲み込んだワールドトレードセンター跡地を見つめていた。

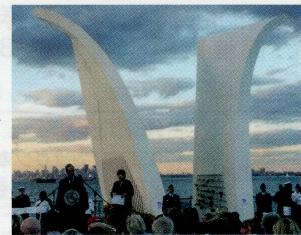
ワールドトレードセンターは実は、日系人のミノル・ヤマサキ氏が設計している。竣工当時、「あれだけのものを設計できるのは日本人しかいない」とほめちぎられていた。というのに、崩れ落ちた時には、「日本人が作ったからね。あえなく倒壊したぜ」とこきおろす人が。しかし、すぐにもスペインの新聞が「さすがに日本人の設計は素晴らしい。倒れ込まずに中に崩れ落ちた」と打ち消してくれている。「ワールドトレードセンターの歴史を始めたのも慰霊碑を建てて閉じたのも才能ある日本人だった」。食事も睡眠も確保できないまま、持てる力を振り絞って制作に打ち込んでいた曾野氏に、人々はこう耳打ちしたという。

前述の住山さんは、「とにかく真実が知りたい」と500ページにわたる『911調査委員会報告書』の邦訳に挑んだ。父親の悔しさと執念が凝縮された翻訳本は、今年9月に刊行される。ご子息が亡くなつてから20年。享年34歳だった。

(ふくなが・かつこ)

上智大学卒。在NY6年。マンハッタンビルカレッジで修士号(MAH)。帰国後は海外生活カウンセラーとして講演執筆多数。

福永佳津子オフィシャルサイト→



追悼モニュメント“Postcards”